

## 小学校でネット型球技（ホールディングバレーボール） をやってみよう

— 攻防の相互発展的な指導系統の確立をめざして —

構成・文 玉腰和典（愛知県立大学大学院・日本学術振興会特別研究員）  
久我アレキサンデル（愛知県立大学大学院）

### ホールディングバレーボールとは

ホールディングバレーボールとはトス・レシーブ時のホールディングを許容することで、ネット際で展開されるバレーボール独自の戦術的な攻防がたのしめるように改変された教材です。本稿では坂井ひづるさんによる小学校4年生の実践をもとに指導のポイントとなる点を紹介していきたいと思います。

#### (1) ホールディングの許容について

ホールディングの許容は技能習熟とともに次第に制限していきます。最初は肘を屈曲させても、時間がかかってもよしとします。習熟とともに動きや時間に制限を追加していきます。時間のポイントは「い〜ち」のリズムです。「いち、に」だと2つの動作がはいりレシーブキャッチからトスにもちかえる子どもがでてしまいます。

またアタックは両手ではじくことからはじめ、習熟とともに片手でもよいこととします。  
※ボールは小学生用の軽量のバレーボールです。



肘を伸ばしたレシーブ



額の上でキャッチしてトス

#### (2) 感覚づくり（授業の導入部分）

毎授業の導入で感覚づくりをチームでおこないます。初期の段階ではチーム内ペアでの感覚づくりを中心として、なるべく高いところでボール操作ができるようにジャンプキャッチや両手で下におとす練習などをします。その後、アタックのポイントがわかったときには、チームでねらってアタックする練習をおこなうなど、実践的なグループ練習をとり入れるようにします。



ジャンプキャッチ



両手で下に落とす

# 小学校でネット型球技（ホールディングバレーボール）をやってみよう

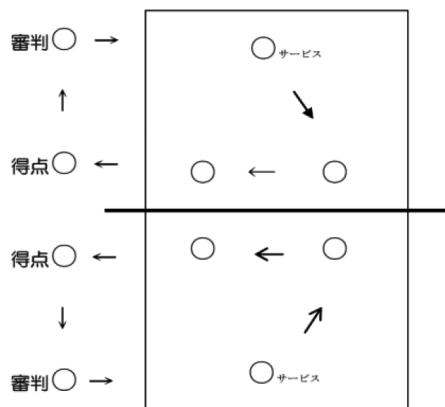
## (3) 攻防の相互発展的な指導系統（ポイントごとの活動に限定して紹介 ※数字≠時数）

①はじめは自コートでアタックにつなげるボールの回し方をおぼえながら、キャッチやアタックの技能を習熟させていきます。

○三角形の一番頂点にいる人が鏡の位置にいる対戦相手に下投げでサービスをする。

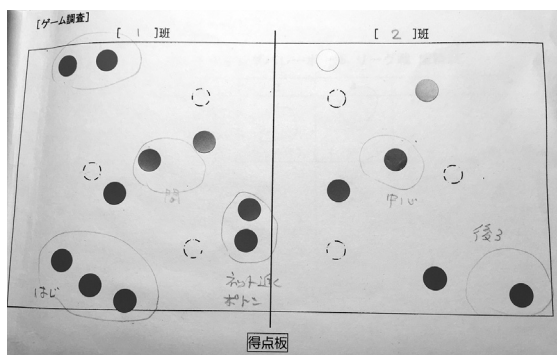
○触球回数は1人1回で、基本は左側の子がアタックをうつようにボールを回す。

○ローテーションは両チームとも得点板をおいた側に回る。得点板の近くからコート外にでて、得点・審判（記録）となり、入るときはサービスからおこなう。



②アタック位置調査（発問「どこでノータッチポイントがとれていますか？」）

ためしのゲームを実施したのちに、誰もさわらないでポトンとおちた場所を調査します。子どもたちからは「コートのはじ、真ん中、奥」「人と人の間（すきま）」といった発見がだされるため、次の時間ではねらうためのグループ練習をしていきます。



アタック位置調査結果

※片手であったり、転びながらキャッチしたりと、さわったけれどレシーブできなかったものもカウントしてもよいでしょう。



空いたスペースをねらってアタック

③レシーブのポイントをさぐる（発問「ねらってくるアタックをどうふせぐのか？」）

空いたスペースをねらうアタックが習熟してくるとレシーブの高まりが必要になってきます。実践では「分担（フォーメーションの工夫）」「構え」「予測」がポイントとして発見されました。さらに、「予測」についての具体的なポイントをみんなで考えていく時間を設定してもよいと思います。この段階になると、相手のフォーメーションが広がっているときは真ん中にアタックをうち、狭くなっているときは奥にうってくることに對して、わざと真ん中をあけておいてアタック時に近づく作戦を考える子もいます。

# 小学校でネット型球技 (ホールディングバレーボール) をやってみよう

## ④ アタック率調査

ここで、何回アタックをうち、そのうち何回(ノータッチ)ポイントを獲得できたのかを調査します。そしてみんながアタックをきめられるようになるまでグループ練習とたしかめのゲームを実施していきます。目標値をきめてもいいでしょう。

[攻めのゲーム調査]		[ ] 班	0点 × 相手 [ ] 班	2点 × 相手 [ ] 班
番	名前	アタック数	ノータッチポイント数	ポイント数
1		正正	0	正
2		正	4	正
3		正正	6	正
4		正	4	正
5		正	4	正
チーム合計		27	15	27

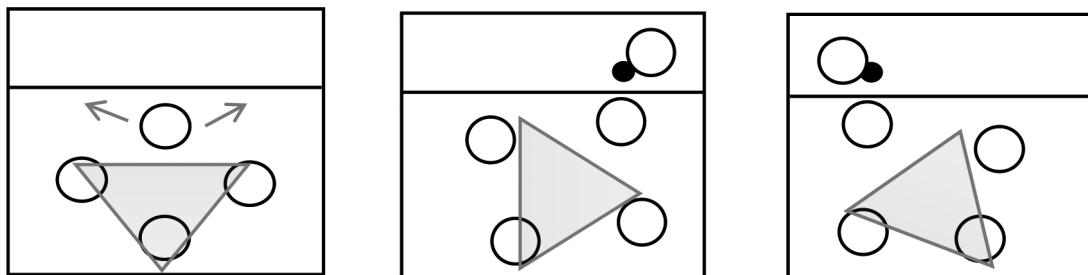
  

[守りのゲーム調査]						
ラ	0回	1回	2回	3回	4回	5回以上
正	正正正	正	正	正	正	
数	4	15	5	2	2	

## 〈以後仮説段階〉

⑤ アタックがとめられなくなったら、ブロックをふくむ4対4へと発展していきます(発問: ブロックをふくめてコートをどう守るのか)。

ダイヤモンド型になって、ネット際にいるプレイヤーが両サイドのアタックをブロックします(トス役にもなれる)。相手からアタックをうけるときは3対3の三角形フォーメーションをそのまま活かせることが理解できるとすぐになれると思います。



⑥ その後、ブロックをはずすためのコンビネーションスパイクにはっていきます。

ダイヤモンド型から始めると、ブロックが1人になるので、時間差をつくったり、2人のアタッカーが同時に動きだしたりといったコンビネーションが成功しやすいです。

## ホールディングバレーボールの由来

もともと1980年代に熊本大学の則元志郎さんが新しいバレーボール教材として開発し、その後熊本大学教育学部の卒業生が集まる民主教育研究会のメンバーによって実践研究がなされていったものです。体育同志会の全国研究大会には1987年にはじめて報告され、その後、佐藤不二夫さんを中心に中学校のバレーボール教材として本格的な実践研究が展開されました。近年2008年に改訂された小学校学習指導要領にネット型教材としてソフトバレーボールが例示されたことからこのホールディングバレーボールを小学校版として実践研究する取り組みができました。まだまだ実践研究の道半ばであるため、本稿が参考にされ、読者のみなさまから実践の反響がえられたら幸いです。

※写真・資料提供 坂井ひづる